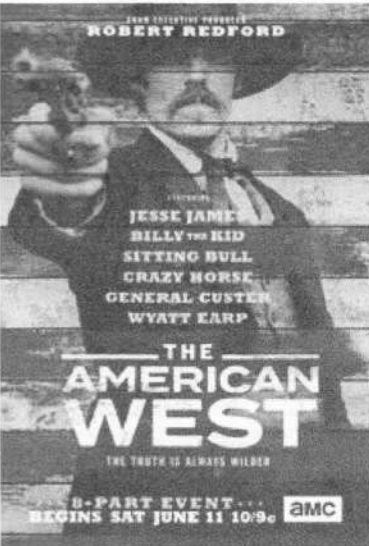


WESTERN UNION EXPRESS

§ § ウェスタン・ユニオン・特急便 第33号 2016年7月9日(土) 発行 § §

最新西部開拓史
ドキュメンタリー

THE AMERICAN WEST



『THE AMERICAN WEST』は、ロバート・レッドフォードが中心になってサンダンス・プロダクションの制作による西部開拓史を飾ったヒーローについてのドキュメンタリー/TV-ミニ・シリーズだ。今年6月11日からケーブルTV局のAMCネットワークにて1時間枠(実質43分)で放映が開始された。南北戦争が終わった1865年から西部開拓地が消滅した189

0年までの期間を8つのエピソードに分けて、昨年8月からロケーションして新たに撮影した再現ドキュ・ドラマとして、有名な俳優のバート・レイノルズ、トム・セレック、ジェームス・カーン、キーファー・サザーランド、マーク・ハーモン、エド・ハリスらや著名な西部史家が所々で其々の見解を述べながら進行させていくという手法をとっている。

シリーズは南北戦争によって2分された国家の再建時代から、西部開拓の急激な進展とその終局に至る間に、インディアン対合衆国騎兵隊の攻防、無法者の誕生と法と秩序の回復等を、西部史を飾った有名人、シッティング・ブル、ジェシー・ジェイムズ、アラン・ピンカートン、カスター将軍、クレイジー・ホース、ビリー・ザ・キッド、ワイアット・アープたちを登場させて描いていく。

現在判っているシリーズの題名は、第1話『America Divided』、第2話『Two Front War』、第3話『Blood & Gold』、第4話『Showdown』で、第5話以降はまだ発表されていない。

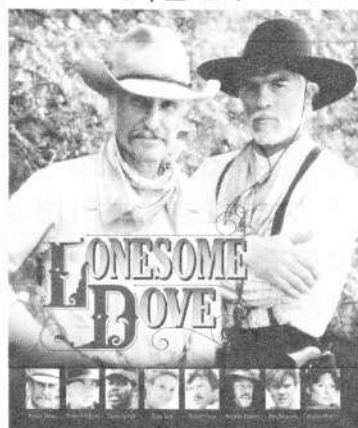
このようなアメリカの歴史ものは、近年日本のTV局ではほとんど放映されなくなった傾向にある。至近時では歴史チャンネルで放映された『AMERICA: 真実の物語』(全12話)と、リドリー・スコットが監修した南北戦争 150周年記念作品『ゲティスバーグの戦い』と『南北戦争 将軍列伝 ~リーとグラント~』ぐらいであろうか。

『THE AMERICAN WEST』は当初歴史チャンネルでの配給/放映を考えていたようだが、それが変更されたので、本邦での放映はかなり難しいと思われるが、どこかCS局の英断を待つかないだろう。(田口)



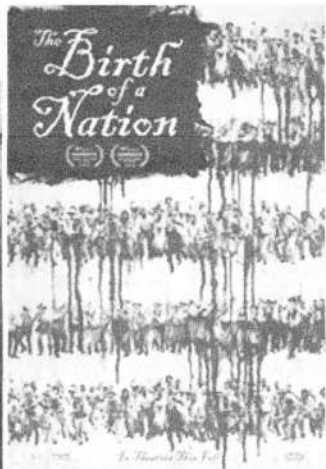
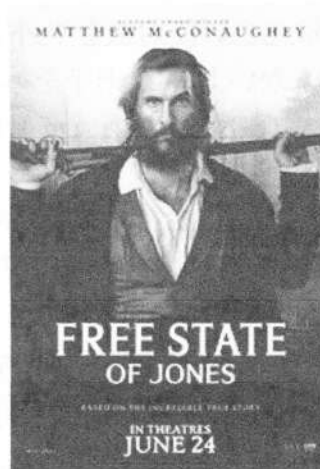
18年の歳月を経て、ついに西部劇の最高傑作がブルーレイ化された!

今日まで作られたすべての西部劇の中で、『駅馬車』よりも、『シェーン』よりも、『捜索者』をも凌駕する西部劇の最高傑作はTV-ミニ・シリーズの『ロンサム・ダブ』において他にはありえない。1989年2月に米国で初放映されて以来、『ロンサム・ダブ』は蘇った強いアメリカの文化的象徴(THE AMERICANA)として、高い評価を受けてきた。日本ではNHK-BSで放映され、今も根強いファンがいる。過去に4巻のVHS・ビデオが発売になっていた。



89年の秋ベルリンの壁が倒され、その2年後にはついにソヴィエト連邦が崩壊して世界は新しい時代を迎えた。共産圏の消滅と共に、1990年代アメリカは唯一の覇権国家として蘇った。そして、強いアメリカと歩調を合わせるように、1980年代に消滅した感のある西部劇が蘇ってきたのは、国家の隆盛と西部劇の係りをまざまざと見せつけた感がある。『グローリー』、『ダンス・ウィズ・ウルブス』、『ラスト・オブ・モヒカン』、『許されざる者』、『ジェロニモ』、『トゥームストーン』、『ワイアット・アープ』等、優秀な作品が連鎖するように次々と発表された。そして、そのすべてが『ロンサム・ダブ』に刺激されていたといっても過言ではなかった。今回日本で8月27日に発売となる『ロンサム・ダブ』のBLU-RAY & DVD BOX(4枚組)は、第1章及び第2章を収録している。続きの第3章及び第4章については、今秋の発売予定となっている。(田口)

19世紀深南部、黒人の解放と抵抗を描いた2本の新作が米国で相次いで公開。南北戦争時代の黒人解放を描いた『Free State of Jones』は7月公開、有名なナット・タナーの反乱を描いた『The Birth of A Nation』は10月に公開される。



ビリー・ザ・キッドの写真から何が分かるのか？

右の写真は、ビリー・ザ・キッドの唯一の写真といわれるものだ。レンズが4つある特殊な写真機(Anthony four tube camera)で撮られたティンタイプ写真だ。ネガは反転したものが出来上がる。それをなぜかそのまま焼き付けたので、ビリー・ザ・キッドは左利きだという説が世間に広まり、ハリウッド映画でも左利きのビリー・ザ・キッドが何度か映画化された。写真が左右逆だと気付いたのは20世紀も戦後になってからであった。



そこでこの写真から、一体ビリー・ザ・キッドの何が分かるのか、西部史の雑誌「TRUE WEST」マガジンが、この写真について色々検証しているので、それを参考に話を進めるとしよう。



この写真は1879年末から80年初めの頃に、フォート・サムナーのビーバー・スミス・サルーン正面の野外で撮られたとされる。右の写真は、原版を少し修正してクリアにし正しく反転させたものだ。写真のキッドを見て、ずいぶんむさ苦しい恰好をしていると思う人もいるらしいが、寒い冬場荒野から帰ってきたキッドが、たまたま移動写真屋と遭遇し、そのまま撮ってもらったので、極めて日常的で自然な姿を映し出しているといえる。

恐らく西部劇ファンにとって違和感があるのは、まず帽子の形だろう。鍔が上に反ったカウボーイ・ハットでないのはいかにもダサイ？ でもこれが19世紀の男たちが一般的に被るスローチ・ハットだ。但しキッドが好んだ鍔広のソンプレロとは違っているようだ。よく見るとキッドの左側(写真の右側)に2本の足がある白い反射板をキッドに当てている。彼は顔が陰にならないように、帽子をあまりに被り直したのかもしれない。①に見えるのは反射板を後ろから支えている人の指先だ。

次に冬場であるが西部男としては珍しくも毛糸のセーターを着ていることだ。サイズはキッドには大き過ぎるようで、②の処にPM(ピート・マックスウェル)のイニシャルが入っているというから、譲り受けたものなのだろう。また、セーターにはフードがついているという。③の白い線模様の一部から、キッドはデザインが錨の型をした

胸当てのあるシャツを着ていると写真の専門家は指摘している。④の小指にはめた大きな指輪は、ギャンブラーが好んでするピンキー・リングだ。腰のホルスターに収まっているのはコルト.44のようだ。⑤のバックルの留め金が右を向いていることで、元の写真が左右逆であると確認することが出来る。それは⑥のウィンチェスター73・カービン銃の弾丸(.44-40)の装填口が右側面になければならないのと一緒にだ。元写真では装填口が左側面にあることになるので、これが写真の左右が逆かどうかを判定する極めて重要かつ簡単な決め手となる。⑦のキッドの右足後ろに少し出っ張って見えるのは、これは写真に撮られる人が動かないように安定させるためのスタンドの鉄脚の一部だ。(下図を参照)



以上のように、古写真には色々な情報が隠されている。ただ漠然と見ているだけでは気が付かないのだが、注釈を読んだり、解説してもらえば、新たな発見と一段と興味深く感じる事が出来るのだ。(田口 利人)